

やすだのぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師（阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 聖人の 親縁鳥



イラスト 中川 学

観音勢至もろともに

る人に、その商品がどんなに素晴らしいかを熱く語りま。細かなところなどは、あまり説明し

彼が売るのは、彼が本当に素晴らしいと思つた商品だけ。「ちよつといいな」と思つたくらいの商品は売らない。惚れて惚れて惚れぬいた商品だけを売ります。まず彼は、勧めようとする

友人に「営業の天才」といわれた人がいました。彼の営業は、とてもシンプル。「興味のある人だけに勧める」というもの。

ない。相手がそれに興味を示さなかつたら、あるいはそれに対して「でも、それって」と反論をしたら、その時点で「では、ご縁がなかったということ」と、その人への営業は終え、次の人のところに行き、またその商品を勧めます。

彼の営業は、「ご縁の営業」です。数年、某企業内に私の研究会を作つてくれるという話になりました。「何をテーマにしましょうか」というと、「変なのがいいですね」というので、「運・縁・勘」を研究する研究会を作りました。そのメンバーには阿弥陀寺さんの寺子屋にもよく登場する精神科医の大島淑夫さんもいます。物理学者もいれば、経済学者もいれば、脳科学者もいる。英語の文献や論文を読むために英語の専門

「ご縁の力」

家もいます。研究会といつても、みんなで文献や論文を持ち寄り、持ち寄りなかつたりして、わいわいとおしゃべりをするのが大半。会議には必ずおいしい食事とワインやビールが用意されます。やはり脳を活性化することが必要な創造的な会議には、食事やお酒は必須です。

この研究会は、私の「ご縁」の力が驚異的であると、その企業の方が思ったのがきっかけでした。たとえば東京のドトールで親子連れに席を譲つたとき、実はその人のご主人が、その十年ほど前にチベットで会つたチベット人であつたということがありました。一九八七年、私はひとりでチベット旅行をしました。明治時代に日本人として初めてチベットへの入国を果たした河口慧海師が「能の『翁』はチベット語である」と唱えた説を確かめに行つたのです。

「翁」は「とうとうたらりたらりら」という、とても日本語とは思えないような謡から始まります。慧海師は、これはチベット語による太陽賛歌であるとし、その日本語訳を朝日新聞紙上に掲載しました。しかし、チベット人から「そんなチベット語はない」と言われ、現在ではその説は完全に無視されています。

でも、魅力的でしょう。能にして能にあらざる言われ、もつとも神聖視されている『翁』の謡い出しがチベット語。そこでチベットに行つたのです。

下手な中国語を駆使して、お寺に行つたり、民家にお邪魔したりして「こんなチベット語、ありませんか」と聞いて回りました。するとひとりのお爺さんが「聞いたことがある」といふのです。そして、もつと詳しい人を連れて来るよと言つて、その方が歌つてくれたのが「あ

らたらたらりら」といふものではないか」といふのでした。似ていた。と。とうとうたらりたらりら」と。意味を聞いたら「意味はない」と言います。これは「ケサラ王」という王の叙事詩。この「あらたらたらり」を歌つているとケサラ王の霊が降りて来て、自分がケサラ王になり、そして自分の業績を叙事詩として語るのだといふのです。

そんなご縁が、たくさんあります。

そして、その十年後、「あらたらたらり」を歌つてくれた方に、偶然、東京のカフェで会つたのです。こんなご縁が、たくさんあります。

とても興味を引かれたましたが帰国しなければならなかつた。もう一度、チベットに行つて、さらに探究をしようと思つていたら、翌年、「チベット大暴動（チベット側の言い分では「チベット大虐殺」）があり、それ以降、自由なチベット旅行はできなくなつてしまいました。

観音勢至もろともに

そんなわけで「縁」の研究会を始めたのですが、この「縁」、親鸞聖人もご和讃の中で何度か言及されています。そのひとつを紹介しましょう。

観音勢至もろともに
慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも
休息あることなかりけり

最初の「観音勢至」というのは「観音」さまと「勢至菩薩」さまです。

観音さまは「慈悲」の菩薩。慈悲の「慈」とは楽を与えること。「悲」というのは、苦しみを抜いてくださるということ。

観音さまは『般若心経』というお経の中では、観ることが自在な菩薩さま、「観自在菩薩」ともいわれます。「苦しんでいる人はいないかな」、「困っている人はいないかな」と世の中を見まわして、その苦しみを取り除いてくださるのが観音菩薩さ

まです。そして、勢至菩薩は「智慧」の菩薩。智慧といっても、勉強ができるとか、頭がいいとかいうのとは違います。

悩んでいるときに、何かのきっかけで「ああ、そうだったのか」と楽になることありませんか。よくよく考えたら悩むほどのこともなかった。あるいは、いま悩んでいる以上に変なことが起きた途端に、それまでの悩みなんて消えてしまう。

悩みの多くは考え方によってなくなってしまうのです。そのような「なくんだ、そうだったのか」という考え方が「智慧」であり、それを教えて下さるのが勢至菩薩です。

観音菩薩と勢至菩薩は、慈悲と智慧という「慈悲の光」で、この世界を明るく照らし、少しの間も休みもなく、縁あるものを救い取って下さる、そういうご和讃です。

縁とは何か
苦しんでいる私たちに

「慈悲」と「智慧」で救って下さろうと日夜働いて下さる観音・勢至の菩薩さまですが、ここで大事なのが「有縁を度して」です。「縁」です。

救ってくださろうとしているのに、せつかくのご縁を私たちが無にしてしまう、台無しにしてしまう。そのために観音菩薩は慈悲にも、勢至菩薩の智慧にも出会うことができずに苦しい日々を送っています。

では、「縁」とは何でしょう。

良寛禅師の詩に「花開く時蝶来り、蝶来る時花開く」という一節があります。

私たちは、「花が開いたから蝶が来る」と思っています。しかし、ひよつとしたら「蝶が来たから花が開いた」のかも知れない。良寛さんはそう歌います。

「花が開いたから蝶が来る」というのはわかりやすいですね。これは縁の「因」です。原因があつて結果がある。「因

果」ともいいます。

「すべての結果には原因がある」というのが現代社会の考え方です。遅刻をすると「なぜ、遅刻をしたんだ」と聞かれま

す。失敗すると「なぜ、失敗したんだ。原因を考えてみる」と言われます。しかし、その反対もあるのでは、と良寛さんはいいます。「蝶が来たから花が開いた」ともいえるんじゃないかと。

「お父さんとお母さんが出会ったから、お前が生まれたんだよ」といいますが、「お前を生むためにお父さんとお母さんが出会ったんだよ」ともいえるというのです。

これが因縁の「縁」です。一方向ではなく、双方向の働きが「縁」なのです。観音さま、勢至さまの慈光を受けるには、おふたりからの働きかけではなく、私たちの働きかけも大事なのです。

余計なことはしない
ところが、この「縁」、

働きかけが大事と書きましたが、「縁」を活性化するための働きかけで大事なことは「余計なことはしない」ことです。何かをしすぎると「因」になつてしまいます。

最初に書いた営業の天才の友人のことを思い出してください。彼は「勧める」ことはしませんでした。しかし、それに興味のない人にはそれ以上勧めない。「ご縁がなかったから」とすぐにやめてしまいます。その商品を売るために大々的に宣伝をしたり、いろいろなプロモーション・ツールを使つたりはしません。

「お伝えはする。しかし、それ以上はしない」それが彼の方法です。彼にもう少し話を聞くと、興味がないと言った人を見捨てるわけではないそうなのです。

「日本人は一億人いるから、一億一番目に置く（この数字はむろん「比喩」です）」というのです。彼が売る商品が全員に売れたら、またその人のと

ころに行く。

「だって、この商品が必要な人、ご縁がある人が本当はたくさんいるんだから、ご縁がない人に時間を割くのは、必要な人、ご縁がある人に申し訳ないでしょ」と彼はいます。

このようにしていると、彼の周囲にはいつの間にか「ご縁のある人」だけが集まるようになります。ご縁の力が高まるのです。そして、いろいろな人に出会うようになります。

いろいろな人と出会うと、自分だけではできなかった、いろいろなことができるようになります。「他人のふんどし」で相撲を取ることができるようになるのです。

その最高の方が、観音さまであり、勢至さまであり、そしてそれらの力の集合体である阿弥陀さまです。

「することはする。しかし、余計なことはしない」ということを心掛けて、ぜひ「縁」の力を高めてください。